

30 分割後期・二次 国 語

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、12ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 先輩からの助言を謙虚に聞く。
- (2) 弟を伴って祖父の家を訪ねる。
- (3) 車で引越しの荷物を運搬する。
- (4) 夕空を仰いで、明日の天気を予想する。
- (5) 雨にぬれたあじさいは、色の濃淡がきわだつ。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 独立して新しい店をカマえる。
- (2) この地域の気候は一年を通じてオンダンだ。
- (3) 図書館で、必要な資料のフクシヤを依頼する。
- (4) 東京の冬は、湿度がヒクく乾燥する日が多い。
- (5) 説明の内容をオギナうためにグラフを見せる。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

高校三年生の華菜と智香は、FMフルスという地元のラジオ局が募集していたラジオ番組の進行役に応募し、番組を担当していた。しかし、智香は事情ができたため、数週間前から番組を休んでいた。そのような中、華菜はラジオ局の取締役である海老沢に呼び出され、FMフルスのオフィスに向かった。

エレベーターに乗るための通路の横、一階の居酒屋が、シャッターを降ろしている。定休日らしい。見慣れない光景に、月曜にFMフルスに来るのは初めてなんじゃないかと気づく。金属のワゴンが出しっぱなしだ。⁽¹⁾呼吸を止めて、エレベーターを降り降りする。四階。

扉を開けると、こつちが何か言うより先に、オフィスに一人で、デスクに向かつて何か書き物をしていたらしい海老沢さんが、おう、と言って片手をあげた。わたしは頭を少し下げる。

「忙しいのにごめんね。じゃあこつちのソファでいい？」

立ち上がり、そう言う海老沢さんに、はい、と答え、部屋の隅のソファに向かう。海老沢さんが手のひらで指し示したので、壁に背を向ける形となり、奥のソファに座る。隣に置いたりユックの上に、脱いだコートをかぶせる。

「お茶でいい？」

「はい、ありがとうございます。」

海老沢さんがお茶を淹れにいく。遠慮したほうがよかったのだろうか。昨夜、着信音が鳴った。またアヤちゃんに違いないと思ったけど、表示されていたのは海老沢さんの名前だった。

ちょっとラジオについて話せるかな、と言われて、思い当たる何かがあるわけじゃなかった。今この瞬間だつてない。ほめられるのか叱られるのかもわからない。まさかここでまでアヤちゃんのことを責められるとは思わないけど、放送内でいい話をしたという実感だつてない。

「はい、どうぞ。突然呼び出して申し訳ないね。」

目の前に置いてくれた湯呑みの中には、緑茶が入っている。喉が渴いているけど、少し冷めるのを待つことにする。

海老沢さんはわたしの向かいに座ると、足を広げ、膝ひざに肘ひじをつけて、中央で両手を組んだ。やっぱりひよろりとしている。こうして向かい合うつと、どうしたって面接のときのことを思い出す。

「ラジオの話なんだけど。智香さんは、これからもしばらくお休みするの?」

そのことか、とわたしは納得する。

「あと一回だけ休んで、そしたらまた二人でやる予定です。」

口にすることで本当になればいいなと思う。来てくれないと困るよ、というわたしの言葉に、うつむいていただけの智香のことを思い出す。

「ああ、そうなんだ。」

「なんか塾のテストがあるとかで。」

付け加えて、言い訳しているみたいな気持ちになった。

海老沢さんは二回うなず頷うなずき、何も無い、つるつると光る床を見た。他にも何かあるのだろうか、と思ったタイミングで、質問が来た。

「華菜さんは、番組やっていて楽しい?」

華菜さんという慣れない響きの言葉。答えに少し悩む。わたしは楽し

んでいるだろうか。

「いい経験になるかなって。」

嘘うそにならないように答えたつもりだった。海老沢さんは、また二回頷うなずいてから言った。

「このあいだの回なんだけどね、ドラマの話してたでしょう。」

「はい。」

海老沢さんが一瞬、口の両端を動かして、困ったような表情を浮かべる。これからよくない話が続くのだ、と察した。

「少し話すくらいなら問題ないし、華菜さんが興味を持つてる話題を出すっていうのは、もちろん大事なことだと思っただけど、ドラマを見てない人にとっては、ちょっとわかりにくかったかなあって気もするんだよね。僕も見えないから、紹介されてたセリフとかがね、あんまりピンとこなかったというか。まあ、僕が相当なおじさんなのもあるかもしれないけど。」

海老沢さんは、はは、とちよつとだけ笑った。⁽²⁾「一緒に笑っていいのかわからず、頷うなずいた。お茶を飲む。まだ熱い。

「せつかくだから、ラジオならではのことやってほしいなあって気持ちはあるかな。テレビの紹介とかじゃなく。」

「はい。」

意味はよくわからないまま頷うなずいた。ラジオならではのこと。

「テレビは確かに多くの人が見てるものだけど、みんなが見ているわけじゃないんだよ。」

「はい。」

また繰り返した。

「今、好きなラジオ番組とかある？」

「たまに夜に聴いたりはしますが、毎週っていうのはあんまりないです。テレビは見ますけど。」

「そうかあ。」

声に、あからさまにガッカリした色があった。

この人はラジオがものすごく好きなのかな、と思った。今まで考えたこともなかった。もちろんFMフルスで働いているのは知っているけど、気分転換的な意味合いが大きいのではないかと想像していた。でもそうじゃないのかもしれない。本気でラジオに関わりたくて、そうしているのかもしれない。

海老沢さんは、組んでいた両手を外すと、今度はそれぞれを膝に置き、わたしの顔を見ながら言った。

(4) 「僕はね、テレビとラジオはまるで違うものだと思うんだよ。」

「はい。」

今度は同意して頷く。確かにまるで違うものだ。またお茶を飲んだ。

「ラジオはテレビの代用品じゃないし、劣っているわけでもない。」

今度は、はい、とは言えなかった。その二つは、金メダルと銀メダルみたいに違っていると思う。そして金と銀なら、どっちがいいか明らかだ。「違いはたくさんあるけど、中でも、何かあった人に深く寄り添えるのは、ラジオなんじゃないかなって思うんだよ。」

わたしに話しているというより、自分に言い聞かせているようにも感じられる話し方だった。

「受け手との距離が近い。ラジオには、ラジオにしかできないことがある。」

ゆっくりと噛んで含めるように話す海老沢さんが、さつきデスクで書いていたのは、もしかしたら自分の番組の台本だったのかもしれない、とふと思った。当たっているかはわからない。ただ、さつき思った、この人はラジオがものすごく好きなかもしれないという想像は、当たっている気がした。

FMフルスで海老沢さんがやっている毎週土曜の夜の番組を、そういえばわたしは、聴いたことがない。一度聴いてみようと思っていたのに。毎週来ているけど、ここがどんな場所なのか、どんな意味を持つのかを、あまり深く考えてこなかった。海老沢さんは、誰かに深く寄り添うために、本業のかたわら、ここにやって来ているのだろうか。

(加藤千恵「ラジオラジオラジオ!」による)

(注) アヤちゃん——華菜の友人。番組内で勝手に紹介されたことで、華菜を責めている。

〔問1〕⁽¹⁾ 呼吸を止めて、エレベーターを乗り降りする。とあるが、この表現から読み取れる華菜の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 海老沢が理由もなく突然呼び出したことに對して、不満に思いながらFMフルスのオフィスに向かっている様子。

イ 海老沢が前回の放送内容について評価していたため、期待しながらFMフルスのオフィスに向かっている様子。

ウ 海老沢から呼び出された理由が分からないため、緊張しながらFMフルスのオフィスに向かっている様子。

エ 海老沢と好きなラジオについて話をするため、喜びを感じながらFMフルスのオフィスに向かっている様子。

〔問2〕⁽²⁾ 「一緒に笑っているのかわからず、頷いた。とあるが、華菜が「頷いた」わけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 海老沢の発言の意図は理解できないが、とりあえず話を聞いているという姿勢を示そうと考えたから。

イ 海老沢がほめてくれたことに自信をもったが、冷静に話を聞いているという姿勢を示そうと考えたから。

ウ 海老沢の話を全く聞いていなかったが、悟られないよう聞いている姿勢だけでも示そうと考えたから。

エ 海老沢が真剣に話す姿に驚いたが、とりあえず忠告を聞き入れているという姿勢を示そうと考えたから。

〔問3〕⁽³⁾ 声に、あからさまにガツカリした色があった。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 華菜の弁解に対する海老沢の声を、豊かな色彩を表す言葉を用いて描くことで、海老沢のラジオへの思いを表現している。

イ 華菜の態度に対する海老沢の声を、抽象的な言葉を用いて描くことで、海老沢の番組に対する曖昧な心境を表現している。

ウ 華菜の予想外な反論に対する海老沢の声を、簡潔な言葉を繰り返し用いて描くことで、海老沢の困惑している気持ちを表現している。

エ 華菜の回答に対する海老沢の声を、状態を形容する言葉を用いて描くことで、海老沢の落胆する気持ちを表現している。

〔問4〕⁽⁴⁾ 「僕はね、テレビとラジオはまるで違うものだと思うんだよ。」とあるが、この表現から読み取れる海老沢の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア ラジオに対して真剣に向き合っていない華菜にいきどおりを感じたため、ラジオに対する自分の思いを押しつけようと思っている。

イ 華菜にはラジオに関わる者としての認識が不足していると感じたため、ラジオ番組の進行役としての在り方を話そうと思っている。

ウ 華菜に気分転換のためにラジオに携わっていると誤解されていたことが分かったため、ラジオ番組の進行役として残念に思っている。

エ 華菜がテレビはラジオより優れていると考えていたため、ラジオの方が優れているということを納得できるまで説明しようと思っている。

〔問5〕⁽⁵⁾ただ、さつき思った、この人はラジオがものすごく好きなのか

もしれないという想像は、当たっている気がした。とあるが、華菜がこのように思ったわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア デスクで書き物をしていた海老沢の姿を思い出し、私に話すことを台本にしていたことが分かったから。

イ 以前聴いた海老沢のラジオ番組を振り返り、やっと語られた話の意味を理解することができたから。

ウ ラジオならではの役割を真剣に訴えようとしている海老沢の姿を見て、ラジオへの愛情を感じたから。

エ ラジオの方がテレビよりも優れているという海老沢の考えを聞き、ラジオに対する自分の思いと共通していると感じたから。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

日本には昔から「ほどほど」という美にいい言葉があります。「ほどほど」には、やりきらずに手前で留めておくといったニュアンスがあります。（第一段）

これをデザインにそのまま置き換えてみると、「ほどほどのデザイン」となる。それだけを耳にすれば、あまりいいデザインではないような印象でしょうが、「ほどほどのレベルを徹底的にデザインする」、あるいは「ほどほどのデザインを極める」こととして捉えるなら、印象は一変するはずで、つまり「ほどほど」とは、やりきることも承知しながら、敢えて手前のほどよいところを見極め、そこで仕上げておくことなのです。（第二段）

この、少し手前でほどほどに留めておくデザインによって生まれる「空き」こそが、人がものと自分なりの仕方付き合うことを可能にする余地になります。そもそも人は、それぞれ価値観も違えば生活におけるあらゆる行動のとり方も一人ひとり違います。しかるに、完成しきって「空き」を持たないものを前にして、なんだか壁に阻まれているみたいだと感じたことのある方は少なくないと思います。もののほうから一方的に「こう使え！」と言わんばかりであったり、ものとしては美しいけれどまったく実用する気にならなかつたりするのも、「空き」がないためなのかもしれないのです。（第三段）

(1) 本来デザインは、それ自体に価値があるわけではなく、デザインされたものと付き合う人との関係の中で効力を発揮するのです。人の価値観はみな違うのだから、デザインは人それぞれの価値観で関わることでできる、ほどほどの領域で留めておくべきなのではないでしょうか。そこ

に「空き」が生まれます。「ほどほど」という曖昧な日本語の中に、実はデザインがなすべき大切なヒントが含まれているように思います。そしてこの「ほどほど」を、古来の日本の日常生活用具のそここに垣間見ることができるとです。(第四段)

私たちの日常生活の中で何気なく使われている道具を人との関係で観察し直してみると、日本ならではのデザインが見えてきます。例えば、使う人の能力を前提に成立しているもの。ご飯を食べる時に使う「日本の箸」はその代表格です。先を細くした二本の棒を使いこなすだけで、小さな米粒や豆や、けっこう大きなジャガイモまで挟むことができるばかりか、この単純きわまる道具で肉を切り離したり柔らかいものを刺して割ったりと、用途は多様で、小さな頃から経験を積んだ我々は、毎日のように二本の棒を無意識に使いこなしているのです。ここには西洋のフォーク、ナイフとは全く異なる「関係のデザイン」が見られます。現代のフォーク、ナイフには取手の部分があり、握りやすいように膨らんでいて、膨らみ具合がデザインの特徴になっている場合も多いでしょう。対するに、箸には取手に充たる部分がなく、取手どころか、どの指はどこに当てて、といったデザインは一切施されていません。(第五段)

ものの側から「このように使ってください」と教えずデザインではなく、素材のままそこに在って、見掛けは「どうぞご自由に」とやや素っ気ないくらいですから、箸を初めて目にした他国の人は、いったいこれをどう使うつもりなのか？と面食らうに違いありません。しかし使用法をマスターしてしまえば、食べるための道具としてのこの使い勝手の良さは他に代えがたいものになることでしょう。つまりは、二本の棒で

ある単純さが、人の本来持っている能力をむしろ引き出しており、そこには人の所作さえも生まれます。箸において日本人は、それ以上の進化による利便は求めてきませんでした。ですから西洋のフォークとナイフのような目に見える進化はしなかったものの、日本の箸は、主に木や竹を使い、先をかなり細くすることで、より繊細な動きに対応できるような微妙に進化したのみならず、漆塗りのような丁寧な表面仕上げや材質選びにも伝統が活かされてきました。このように当りまえの日常の中に、ほどほどのところで留めておきながら徹底的に突き詰めようとする日本らしきを見出すことができます。(第六段)

食べるための道具は、食物と人間との関係によって進化してきたのですから、それぞれの国や地域の食文化全体の中で見極めていく必要がありますが、これだけ食の流通が行き届き、世界中の食べ物が手に入るようになった今もお、日本の箸は、あくまで日本の箸であり続け、しかも日本食が世界的なブームとなり、箸を使いこなす海外の人々も増えている事実注目すべきです。⁽²⁾誰々が派手にデザインした何々に、ではなく、アノニマス(匿名)な箸のようなものにこそ、世界に誇るべき日本のデザインが豊かに潜んでいるのですから。(第七段)

もう一つ、忘れてならないのが「ふろしき」です。何十通りもの包み方があり、あらゆる包む対象に合わせた対応が可能ばかりか、使わない時には小さく畳んでおける。つまり自由自在に変化できる一枚の布の状態に留めてあるわけで、それ以上はデザインしていません。バッグのように持手を付けた袋状に縫ったりは敢えてせずに、どこまでも原型を保ったまま使われ続けている。我々が何もかもを便利至上に走っていたのであれば、

すでに息絶えてしまってもおかしくなかった道具の一つなのかもしれませんが。しかし人間の側に備わっている「考える」力や「適応する」力を引き出す余地をたつぷり残した「ふろしき」という一枚の布が、宅配便でも便利に届くこの時代にまでちゃんと残っていること自体が注目に値します。これも、やり過ぎないほどほどのデザインの典型なのです。ある意味で不便な一枚の布が、ほどほどなところで留められたことによって、無限と言いたいほど表現可能なキャンパスになっている。(第八段)

また、少しばかり昔の日本の生活を思い出してみるなら、普段は折り畳んで仕舞い、使う時だけパタパタと広げて、必要なところに置けば室内の間仕切りとなる「屏風」などにも、「箸」や「ふろしき」と同じ「ほどほど」が見えてくるはずです。今後甦るべき道具を、多く日常生活文化史に発見できるのではないのでしょうか。(第九段)

(3) デザインを考えることは、人の豊かさとは何かを考えることに他なりません。今、二十世紀後半を振り返ると、生活道具をあたかもオブジェのように完成させて、その美しさを競った時代のように思えます。二十世紀も同様にオブジェとしてのデザインを我々はなし続けるべきなのでしょう。日常を少し見回してみただけでも、箸やふろしきや屏風のように日本人の振る舞いに準じて育まれてきた素晴らしいものが残っているのだと気づかされます。そしてそれらが体現しているのが「ほどほどを極める」なのです。(第十段)

人間の身体どころか心までを使わないで済むようにしてきてしまった必要以上の間違った便利さを見直して、ほどほどを極めるレベルを今一度模索しなければならぬ時が来ているようです。それこそは資源の問

題、エネルギー問題、そしてこの国の文化的価値の問題などと密接に繋がっていると思われなりません。(第十一段)

心と身体を使わないで済むような便利さが、果して人を本当に豊かにするのか。昔から普段よく言われてきた「ほどほど」や「いい塩梅」などの言葉が、実は日本人が忘れてはならない大切な感性をしかと伝えているのです。(第十二段)

(注) オブジェ——美しさを表現するためのもの。
(佐藤卓「塑する思考」による)

(1) 本来デザインは、それ自体に価値があるわけではなく、デザインされたものと付き合う人との関係の中で効力を発揮するのであるが、「デザインされたものと付き合う人との関係の中で効力を発揮する」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 完成しきったデザインは、異なる価値観を持つ人の使用を前提とするため、誰もが自分なりの使い方で使用できるものであるということ。
- イ 完成しきったデザインは、見た目の美しさを優先して仕上げることで、使う人の能力を引き出す余地を生み出すものであるということ。
- ウ 「ほどほどのデザイン」は、ほどよいところを見極めているため、人の行動や価値観が道具によって決められるようになるということ。
- エ 「ほどほどのデザイン」は、使う人の価値観に合わせて使えるようにすることで、人との間に価値を生み出すものであるということ。

〔問2〕 この文章における第五段の役割を説明したものととして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた「ほどほどのデザイン」の柔軟性に基づいて、その考えを要約することで、結論を導き出している。

イ それまでに述べてきた「ほどほどのデザイン」の独自性に対して、批判的な意見を示すことで、話題の転換を図っている。

ウ それまでに述べてきた「ほどほどのデザイン」の有用性について、具体的な事例を挙げることで、論の展開を図っている。

エ それまでに述べてきた「ほどほどのデザイン」の多様性を受けて、問題点を順序よく整理して分かりやすく説明している。

〔問3〕⁽²⁾ 誰々が派手にデザインした何々に、ではなく、アノニマス（匿名）な箸のようなものにこそ、世界に誇るべき日本のデザインが豊かに潜んでいるのですから。とあるが、ここでいう「アノニマス（匿名）な箸のようなもの」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 使う人に作り手を意識させず、時代を超えてほとんど姿を変えることなく日常に溶け込みながら使用されているものということ。

イ 二本の棒という単純なデザインでありながら、使う人の能力に関わらず誰もが初めから使える形に進化してきたものということ。

ウ 食文化の交流が進み、世界中に流通が行き届いていることの象徴として人々に使用され続けているものということ。

エ 普段使用しない時は隠れている作り手の個性が、実際に使用することで現れるようになるものということ。

〔問4〕⁽³⁾ デザインを考えることは、人の豊かさとは何かを考えることに他なりません。と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア デザインを考えることは、道具をより美しいものへと改善していくことであり、便利さを追求し続けることで社会全体がさらに発展していくことだと考えたから。

イ デザインを考えることは、人との関係性を考えることであり、人に備わっている能力を用いながら生活することの大切さを再確認する必要があると考えたから。

ウ デザインを考えることは、現代の様々な問題の解決方法を模索することであり、ほどほどを極めることにより日本の豊かさを世界に広めることができると考えたから。

エ デザインを考えることは、人間の心と身体の在り方を問い直すことであり、資源やエネルギーを使用しない生活を実現する道具を作り出す必要があると考えたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「ほどほどを極める」という

テーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。や「なども、それぞれ字数に数えよ。

5

次の文章は、西行法師の和歌に関する対談の一部である。「2番、3番、5番、6番」とあるのは、対談中に取り上げられている和歌を表すものである。また、 内の文章は、それらの和歌の現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。

（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

永田 西行の一首の中には身と心をいうのが飛びぬけて多いですね。なかでも2番、3番、5番、6番、いずれもそうですね。身というのは殻で、その中に心が入って身体になる。身体から心が出て行ったら、殻が残るといふ、そういう感じで、西行の場合は身体から心が出て行きやすい。2番なんかは完全にそうですね。心が身の中につくり納まってくれない、そんな歌ですね。

- 2 吉野山よしのやまこずゑの花を見し日より心は身にもそはずアなりにき
- 3 空になる心は春の霞かすみにて世イにあらじとも思ひ立つかな
- 5 花に染む心のいかで残りけん捨て果ててきと思ふ我が身にエ
- 6 うかれ出いづる心は身にもかなはねウばいかなりとてもいかにかはせん

松本 意識して並べてみたのですが、身から抜け出て浮かれるというこ
とに対して意欲的でさえあるんですね。自分の世界を大きく広げてい
くためには、もっともっと浮かれようと。

永田 そのところは西行の中では非常に重大問題で、むしろ西行の中で
は自分の身から心が浮かれ出してしまうのを、なんとか止めなきゃとい
う、そんなに禁欲的ではないけれども、むしろほっといたら出しま

うので……。

松本 止めなきやいけないと、そういう歌もあるのです。だけどそれで繋ぎ止めて、繋ぎ止めたきりにしてしまえば、これまたつまらない。だから、その浮かれて行く先の先を見定めて、自分の精神活動の可能性を見定めたい、とでもいう……。

永田 西行庵へ僕も行ったことがありますけど、ああいうところに籠もって、とにかく花を見て、それから月の歌を作る。特に桜は見ることで、自分の中にあるものをどこかで解放したいというところがありますね。2番の歌でも「心は身にもそはずなりにき」と言っているけど、それは後悔じゃないですね。心が身に添わなくなったことを自分で肯定しているというか楽しんでる、そんな歌ですね。

松本 心というのは目に見えない。だけど桜の散る花びらは目に見える。どうも花というのは、彼にとつては一種の心のあり方、浮かれ出た在り方につながるものだったんじゃないか。⁽¹⁾ 咲くなり散るなり花びらは、映像化でき、ある種の存在性を持つわけですね。そういうものが彼は好きだったんじゃないかと。

永田 和泉式部が「物おもへば沢の螢も我が身よりあくがれ出づる魂かとぞみる」と詠っていますが、和泉式部の場合は、螢がひとつ飛んでいて、それに自らの魂を重ねている。その魂は「わが身よりあくがれ」出て行った螢なんだと。西行もまたそういうところがあって、じっとしていると中に入ってしまう心をなんとか解放したい、とかおびきだすような形で花を見に行った。月を見た。花や月そのものよりも、花を見ていて、遊魂というのか離魂というのか、そういう体験をする瞬間

間に立ち会っている時が、西行にとってある種の生きている実感だった。そんなこともあるのかなあ。

松本 あると思いますね。この身から解放されて、自由に遊ぶ。この世界の果てまで漂っていく。ただし、西行の場合、身というのは、われわれがいう肉体という意味だけでなく、社会的な身分制度とか、世間的なしがらみだとか、そういうものを多分含んでいるのだと思います。

永田 西行の歌を読んでいて、彼の日常と文学の中での彼の立つ位置が、どんなふうに関係しているのか興味があるんですね。北面の武士とはいうものの、彼は上級ではなく下級の方ですね。こんなことではまずいというので、多分、もうちょっと合理的に考えて彼は出家したのだという説がある。僕もそういうことってひょっとしてあつたのかもしれないという気はするのですけど。

松本 積極的に、より可能性に富んだ人生を生きようという、そういう決意が軸なのだと思いますけどね。

永田 西行は出家はしたけれど、いつも俗世間と関わりを持って、身を捨ててとっているけれどもいつも俗世間の中で動き回っていますよね。

松本 いわゆるこの世を捨てるというのはとちよつと違うと思うのです。彼は、しばしば山に籠って激しい行をやり続けています。それもいつ、どこでのちを捨ててもいいという覚悟で、やり続けている。その行は、捨身行、世のため法のため身を捨てるというテーマが必ずついていますね。彼は現世的と思われる行動も意に介さず行う。世のため人のためにやるべきことをやるのだという、そういう覚悟でやっているのです。

(2)

永田 西行はいつも歌人としてわれわれには見えているんですけど、世を捨てるというときの、何を捨てたのかというのがまだもう一つ僕にはわからない。

松本 俗な言い方をすれば希望に溢れて出家したというふう受け取っていいのだと思うのです。世間というものから解き放たれて自由な身になって、ある意味では正体の定まらない存在になった。正体の定まらない人間になって、これから自由に生きていくのだという、そういう思いがここに在るのではないかと思うのですけどね。

永田 それはよくわかる。しがらみから自由になって、これから自由に生きられるという、そういう喜びは。この歌でも「空になる心は」と言っていますが、最初におっしゃった、世のため人のためにといいは、西行の歌からはあんまり感じたことがなくて、僕の中の西行のイメージとしては、ちよつとわからない。

松本 強健な身体をもって修行を重ねているうちに、そうなって行つたと思うのです。西行は心を身から分離させるとともに、一方では身体を使って、徹底して鍛えました。

永田 例えば貧しい人を助けるとか、施すとかそういう業績ではなくて、ある種の政治的にことを動かす力のある人だった。しかし、西行が出家した一番の大きな動機がわからないし、目的がわからない。もちろん、自由になるというのは大きかったと、これは個人的にわかるんだけど、貧しい人、悩んでいる人たちのために、身を捨てたかというところ、そこが……。

松本 この世界そのものの在り方を正せば、万民が救われるという思考

回路だったと思います。

(永田和宏・松本徹「いま西行を読む」による)

〔注〕 西行庵——奈良県吉野山にある、西行が住んだといわれる小屋。和泉式部——平安時代の歌人。

物おもへば沢の螢も我が身よりあくがれ出づる魂かとぞみる
—— 思い悩んでいると、沢辺を飛ぶ螢の火も、私の身体から抜け出た魂ではないかと思えるよ。

(新 日本古典文学大系) による)

行——仏教における修行。

2 吉野山に咲く梢の桜の美しさを見た日から、私の心は身にも添わなくなってしまうた。

3 じつと落ちついていられない心は、春に立つ霞のように立ちこめ、俗世にはとどまるまいと決心することだよ。

5 花に執着する心がどうして残っていたのだろうか。物に寄せる執着はすっかり捨ててしまったと思っっている我が身に。

6 抜け出てゆく心は、我が身の自由にはならないので、どのようにならうとも、どうにもならないことだ。

〔問1〕 文中の——を付けたア、エのうち、現代仮名遣いで書いた場合と異なる書き表し方を含んでいるものを一つ選び、記号で答えなさい。

なさい。

〔問2〕 咲くなり散るなり花びらは、映像化でき、ある種の存在性を持つ⁽¹⁾

わけですね。とあるが、ここでいう「花びらは、映像化でき、ある種の存在性を持つ」を説明したものと最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 桜の花びらは見えるものであり、見えない心を投影することで、身体から解放された心がそこにあるように感じられるものだという事。

イ 桜の花は自由な心の象徴であり、花が散る様子を歌によむことで、過去の歌人の心をより深く理解できるようになるものだという事。

ウ 桜の花びらは見えるものであり、見えない心を花の姿にたとえて歌によむことで、自分の心の美しさを表現できるものであるということ。

エ 桜の花は自由な心の象徴であり、散る花を見ることで、我が身から離れていく世間的なしがらみを投影できるものであるということ。

〔問3〕 永田⁽²⁾さんの発言のこの対談における役割を説明したものと最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 松本さんが一般的な出家の方法について説明した内容を踏まえ、独自の視点から解釈を付け加えることで、問題点を改めて整理している。

イ 松本さんが歌における身と心の関係について述べたのに対し、西行の生い立ちに関わる意見を述べることで、話題の転換を図っている。

ウ 松本さんが西行の出家に関して述べた解釈を踏まえ、論点を焦点化する自分なりの疑問点を提示することで、対談の内容を深めている。

エ 松本さんが西行の出家による歌への影響について述べた意見を受け、それとは異なる観点からの説明を求めることで、話題を広げている。

〔問4〕 強健な身体をもって修行を重ねているうちに、そうなって行つ⁽³⁾

たと思うのです。を説明したものと最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 西行は世の中や世間の人々のために激しい修行を行ううちに、歌で貧しい人や悩んでいる人々を救うようになっていったということ。

イ 西行は世間との関わりを捨てて激しい修行を行ううちに、人々を救いたいと思いつつも俗世間との関わりを失っていったということ。

ウ 西行は貧しい人や悩んでいる人を救うために厳しい修行を行うことで、世間の人々から尊敬を集めるようになっていったということ。

エ 西行は世のため人のため身を顧みない覚悟で修行を続け、身から心を解放して世間的なしがらみから自由になっていったということ。

〔問5〕 花に執着する心がどうして残っていたのだろうか。物に寄せる⁽⁴⁾

執着はすっかり捨ててしまったと思っている我が身に。とあるが、対談に取り上げられている5番の和歌において「どうして」に相当する部分はどこか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 花に染む

イ いかで

ウ 残りけん

エ 果ててき